



「一人きりになること」

ちょっと聞いてよ!

JA西日本くみあい飼料株式会社中国支店 獣医師 中尾 継幸(なかお つぐゆき)氏

先日「移行期の管理」をテーマとした講習会を聴講した際に、興味深い事例が紹介されました。それは群飼養にて乾乳期を経た牛を、分娩に際し分娩房に入れて一頭だけにさせると、他の牛から解放されることでストレスが軽減し、分娩後の体調回復が早まるかと思いきや、むしろ一頭だけに『隔離』されたストレスから代謝病を引き起こす危険が増大するという内容でした。その理由について講師を務めた鈴木保宣獣医師は「社会性動物である牛を単独にすることは、『のんびりゆったり』どころか『耐え難きストレス』を与えることである」と解説されました。人間の感覚での「牛に良かれ」が牛にとっては全く逆効果の事例をまた一つ認識するとともに、たとえ分娩房のような快適な場所であっても、牛が隔離されることに対するストレスは私たちの想像以上に大きいことに改めて驚きました。



アメリカでの調査に、分娩房で三日以上過ごした牛は体内の脂肪組織からの遊離脂肪酸の値が高くなり、第四胃変位等の代謝病の発生率が三倍以上に増えるという報告があります。よって分娩時には牛を分娩房に移動させるタイミングの見極めが重要となります。

社会的な集団を形成する動物において「一頭になる」という状況は、極めて精神的ストレスを招き易い事態だと言われます。農場での乳牛は、基本的に他の牛との同居状態のため隔離されるということは通常ありませんが、分娩時には母牛の行動の自由度が高まり衛生的にも優れることから、清潔な分娩房を用意して単独でゆったりと分娩させることが推奨されています。しかし長時間にわたる分娩房での滞在はかえってストレスとなるのです。

他人と接し共に行動することによって、生活への意欲と充実感・体力が維持されるというところで、やはり人間も牛と同じように社会性動物と言えるのです。

この報告では「理想的な移動は分娩の二十四時間前」とした上で、分娩時刻を正確に推測することは困難で、結果的に数日間も分娩房に滞在する例が生じる点に注意を促し、「完全なる隔離状態を避けるため、分娩房は乾乳牛群の周囲に併設して他の牛が見渡せる状態とし、分娩房での滞在期間は日単位ではなく時間単位で制限されるべきである」と記されています。

人間も一人暮らしを始めると、その気ままさから最初こそ生活が楽しく感じるものの、次第に自由度の高さがかえって憂鬱な気分を招き、いわゆる「一人暮らしのブルー」の状況に陥ることがあるそうです。その要因を専門家は「孤独感」「不安感」は勿論ながら、気楽さ故の「生活の乱れ」が最も注意すべき事項であり、他人との接触が少なくなると生活にメリハリがつかず、緊張感が薄れて気分が不安定となり食欲や体力の低下等の全身症状が現れると述べています。